

情緒障害児の治療経過

研究第6部長 森 脇 要
研究第6部 岩村由美子

I ケースの説明

教養相談に来た母親の言によると、この子(中学3年生、男)は、勉強嫌いで、成績も非常に悪いが、これは頭がわるいので仕方がないが(小学校2年の時の学校での知能検査——団体知能検査ではI.Q.70ぐらいで、それ以来家のものは皆、この子は馬鹿だと思つている。)友人にいちめられて困る。何時もいちめられて、着物は泥だらけにして来、又怪我もして来るので困る。転校させた方がよいと考えて、担任に相談すると、この学校の子はおとなしい方で、他の学校はもつと乱暴ですよと言われるので、どうしたらよいか困つているという。クラスでも皆に嫌われ、理科などでグループになる時は、何時も一人だけはみ出してしまい、先生にどこかの組に無理に入れてもらつている。特別教室での授業などでは、この子が席をとつていても、「おい、どけ」と立たされ、結局席がなくなり、後方に移ることになる。いろいろ困るが、今の一番の問題は友人にいちめられて困ることだという。担任にも話し、乱暴な子に注意して貰つたが効果はない、と親は担任に対しても不信感をもつている。

ビネー検査をすると、I.Q.99であつて、先ず普通である。今までの生活歴を考えると、もう少しよいのではないかと考えられる。友人との関係がうまくいかないのも、本人のパーソナリティの問題ではないかと考えられるので(友人に対して、言語的には非常に攻撃的である)、心理療法を試みることにした。

1. 生育史

熟産。正常分娩。人工栄養。乳の飲み方は悪かつたが体重は順調に増加。10カ月の時、原因不明の発熱が1カ月続き、名大付属病院に入院。現在まで、大病はしないが、余り強い方ではなく、やせ型。始歩1年6月。始語

1年。父の仕事の関係で小学校時代は転校が多かつた。

2. 家族構成

父(52才) 国立大学卒。公務員。母(43才) 高女卒。姉(21才) 薬大在学中。兄(19才) 国立の電機大学在学中。(治療開始時は浪人中だつた。)

本児は小さい頃から非常に不器用で、乳児食のころのオサジの使用も上手ではなく、姉がよく食べさせていた。小学校2、3年の時、学校で知能検査があり、その結果はI.Q.70位だつたので、この子は馬鹿だという確信を深めた。それ以後、家中の人や学校の先生に馬鹿だと思われ、その中で育つて来た。

両親は、当所での知能テストの結果を告げられ、問題は知能遅滞よりむしろ、情緒障害からおこる不適応にあるのだと言われても、“馬鹿な子”という見方はなかなか、直らないようであつた。

本児にとつて、父は非常にこわく、母は、うるさい存在だつたようである。両親の、もしくは父の考え方は、興味あるものがある。例えば兄が一年浪人して、有名な私大の工学部と電気関係の国立大学をうけ、両方にパスしたが、父は自分が国立大学の出身のためであろうが、兄がぜひ行きたいという私立大学は、国立大学と較べて授業料の倍数ほどは良くないという理由で、私大へはやらせなかつた。兄は、大学生活に満足できず、その寮生活にもとけ込めず、家にいる間は、家の中であたり散らし、本児との喧嘩も絶えず、本児にも悪い影響を与えているのがうかがわれる。姉は、家の中の人では一番本児が好んでおり、宿題などもしてもらつたりする。姉の誕生日には、本児は自分で見立てたブローチをプレゼントしたりしている。

II 治療の方法

本児に対しては、週1回、1時間を岩村が担当。母親には、カウンセリング及び情報を得るための面接を、ほぼ1月に1回、森脇が担当した。岩村の本児に対する治療も、森脇がスーパーヴァイズした。岩村と母親が会話することは、本児に安心を与えないのではないかと考え

極力しないようした。

治療室には、一応作業的な材料を入れ、本児が段々に自分の問題を言語的に表現するようになれば、言語を主な手段として、治療をすすめていく方針をとつた。

Ⅲ 治療経過

第1回目は2月21日。9月末現在で28回行っている。出席率は非常によく、欠席は1回のみ。これは、本児が修学旅行から夜行で帰宅し、そのまま眠つてしまい、時間に来られなかつたというのが、その理由である。来所はいつも母と一緒にである。

現在までの段階で、治療の動きを区切るならば、一応4つに分けることができる。しかしこれは、表面的には本児の作業する対象によつて区切られており、パーソナリティの変化をどの程度伴うものであるかは、余り明らかではない。本児の内面の変化は、余り治療室内では見出せない。(治療室外では、相当の変化を示している。)

(1) 1回目から15回目まで(2月から6月末まで)

—治療室内での状態—

本児は兄の影響で、ラジオに関して、一番興味をもっている。第1回目に治療者が「どんな事に興味があるのかしら」ときいたら、「まあ、ラジオだけです。勉強なんか好きなやつは気遣いと思つています」という答がすぐに返つて来た。治療者が、ラジオの事は知らないと言うと、この面では、自分が優位にあると感じたのか、ラジオに関する知識を披れきし、そのなかで、「世の中の人は皆、感電して死んでしまえばいいんだ。そしたら世の中がそれだけ静かになる」「人は信用してはいけない。ラジオの道具を買いに行く時も、決して素人らしく振舞つてはいけない。ごまかされるから」などと、人間全体に対する不信任や、敵意を、度々のぞかせた。

組立てのラジオの種類は、本児の希望によるものではなく、こちらで材料費なども考慮し、適当なものを用意した。組立てに際しては、本児はとても大ざつぱで、手当たり次第、くつつけていくという態度が目立つた。配線図をきちんとみて組立てるといふことは殆んどせず、「その配線は図とちがうみたい」と、ちよつと指摘すると、「だから素人は困るんだ、こつちへつなげれば、結局同じだ。ただ少し線が長くいるだけじゃないか」と言つたりして、治療者の言うことには耳をかさなかつた。

この間目立つたことは、いろんなものに「けちをつける」ことであつた。ハンダゴテは大きくて悪い。ニツパーは切れない。ベンチは絶縁してないから感電しそうだ。線の色が悪いと、来る度に、いろんなものにけちをつけた。治療者は、「道具のこと、よく分らないけど、満足じゃないみたいね」とよく答えた。新しいものを見てすぐにけちをつけるのではなく、手にとり、フンフンなどと、自分は何でも知つてるぞ、というような態度で1

人で合槌をうち、少し動かしたりした後で、けちをつけた。本当は、新しい道具や真空管が、いくらか嬉しいのではないかと思つたが、そのことを本児に言つたことはなかつた。

道具ばかりでなく、人にけちをつけることも、1時間に1、2回あり、この時だけがラジオから離れている瞬間であつた。だがこの瞬間、時間的にもとても短かく、治療者は本児が治療者と相対していると感じることはできなかつた。たとえば、周囲にいる小さい子が騒々しいと、「ガキはうるさいな、だから嫌いだ」「校医さんはけしからん、毎年々々、人にやせてると同じ事を言う」「眼医者なんて、通つて本当に治してくれるのか、お金が無駄になるだけだ」(本児は軽度の外斜視があり、本児の言によると、遠視を直すために、週に一度ずつ、眼科医に通つていると言つていた)等の発言がある。治療者が、そのことに関することをきいたりすると、さつとこの話題から離れて、ラジオの方に戻つてしまつた。本児の独語をきいたのではないかというような錯覚をもつくらい会話的要素の少ない話し方であつた。

治療者に対しては、「そんなこと、おさるさんだつて知つてるよ。おさるは6才位の子の知能があるんだつて」とか、「もうお年寄りで、ひからびてるから、テスターの針持つたつて動かないでしょう」「老眼鏡かけたら」などと言い、これに対しては治療者が「6才位の知能しかないつて言われちやつた」「もう老人か、悲しいね」等と独語的に直すとケラケラ笑つて喜こんでいた。

この様な中にも、ハンダづけが上手にできると、それを自分で認め、「今度は成功だ」と言つたりした。この時は、治療者も、それを認めるようなサポートイヴな発言をした。そのうち、本児の方も、治療者のしたことを「まあ、これならね」など言つたりし、「はじめてM君にほめられたわね」と言つたことがあつた。6月の末ごろまでには、はじめは「——です」といつた紋切型の口調もきえ、いわゆる一応のラポートはついたと言つてよいと思う。ただ、前にも書いけ様に、ラジオの事などでは、割合話のやり取りができるようになっても、本児の内面の世界には治療者が入りにくいと感じることは、現在でもまだ続いている。

この期間中に、ラジオは二つ組み立てたが、配線のてたらめなこと、森脇が観察室からみた時も、その製作態度は心がら楽しそうだとは言えないこと、母の報告を考へ合せると、ラジオに関してだけは、ある程度しつかり

した技術と知識があると思つていたが、そうではないことが分つてきた。

この間、本児の行動から知能遅滞がやはりいくらかあるのではないかと疑つたが、断片的にはあるが、知識の確実なことや、用語の使用の適確さなどから、それは余り重大な問題ではないと考えた。

一つ目のトランジスターラジオは、扱い方の未熟さから配線を正しくしても音を出さなかつた。(本児は、母には、鳴つたと報告したそうである)二つ目のラジオは3球だつた。本児はある所までは、治療者を指図して、一生懸命作つていると思うと、ふつと、「これをこんなに一生懸命作つたつてつまらない。ほくのラジオじやないんだから」と手をはなし、治療者ができないのを知つていながら、「先生やつたら」と言うことが、一時間に2、3回あつた。これは自分の窮極の失敗を予想した防衛的態度と考えられる。

二つ目のラジオは鳴るようにしないと、本児が自信をなくし、ここへも通つて来なくなるのではないかという森脇の判断と、丁度「来週までに、ここまでやつて」と言い置いて帰つた時には、組立ては殆んど終りに近かつたが、配線が間違つており、このままでは鳴らないことがわかつたので、専門家の手をかりて完成させた。

一回の休みの後、殆んど完成されたラジオを見つけた本児は、意外だつたようであるが、すぐにスピーカーをハンダづけして音を出した。本当に鳴るかどうか試してみたい気持があり、音がきこえた時には嬉しい感じを持つたと思う。しかし、自分には完成させられなかつた事を認めたくないようであり、又、治療者にも、それを知られると困るかのようになり、一瞬後には、「専門家なんてつたつて、そこらへんのは何も知らないんだ」とか「この配線なつちやない。こんな不要なものつけて、これ買わせてお金取つたでしよ」と言つたりした。治療者は、「自分でしてみたけれど、全く分らなかつたし、M君がこゝまでしておいてと言つて帰つたから、専門家に手伝つてもらつたんだけど」と発言した。16回目に来た時も、入室してすぐに、「まあ音楽でもききましようか」とすぐスイッチを入れたことからみても、完成したことで安心はあつたのではないかと思う。

一家庭・学校での変化一

この子が友人にいちめられるのは、それだけの理由があつた。ひとの弱点を見つけ、あげあしをとることが、非常にうまく、友人にもそれをやるので、いちめられるのである。

クラスでキャンプに行くことになり、この子がハンゴウ当番で、全部のハンゴウを家に持つて帰つたが、キャ

ンプの当日、行かないというので、母が友人が困るではないかという、友達が御飯をたべられなくて面白いやとよこんでいたという。治療場面だけでなく、攻撃性は非常に強く、いろいろな点にあらわれている。

併し、友人関係は徐々に改善され、いちめられることは非常に少くなつた。6月の修学旅行は、行きたくないと言つていたが、どたんばになつて行つた。3泊4日の旅であつたが、非常に面白かつたらしい。担任の先生の特別な配慮もあつたろうが、この子のパーソナリティがかなり改善され、友人関係がよくなつたためではないだろうか。特別教室で席のとれなかつたこの子は、旅行中自己主張して、好きな寝る場所を確保したのも、著しい進歩である。

母親の言によれば、子どもは非常によくなり、扱いやすなつたという。

(2) 16回目から23回(6月末から8月末まで)

一治療室内で一

16回目(6月22日)は、先にも少しふれたが、ラジオをつけて、音を出し、ほんの少しの間は楽しんでたがそのうち、こんなやさしいものは作つたつてしようがない、第一もう流行おくれた、もつと大きいステレオを作つてこの部屋にじゅうたんを敷いて、この壁をぶち割つて、スピーカーボックスを入れ、防音テックスを貼りたいと話がだんだん大きくなつていく。これまでに何度か、本児の現実の把握の仕方が、どの程度確かなのかを疑わせる発言があり、暫くは話をきいていた。一区切りついた所で、「この部屋は、M君は一週間に一回しか来ないし、他の日には他の人が使うんだけど」と言つてみると「そんな部屋が一つ位あつたつていいじやないさ」という。一時間中、第1回、第2回と同様、次のラジオの計画を一方的に喋りまくる。やはりまだ、現実的水準には立つていないという感を深くした。

この前のラジオは、こちらで用意し、前述のような完成の仕方をしているので、もう一度は本児に選択のチャンスを与えようと考えた。

17回目はアンプの実体配線図を持つて来る。前もつてジャンパーを用意しておく。室内では穴あけをする。いい加減の大きさの穴を、いいかげんの場所に開けようとするので、測ろうと言うと、案外素直にきく。少し意外に感ずる。穴あけはかなり力の要る仕事で、そこでやめてしまつて、スピーカーボックスを作ると言い出す。玩具箱にしてある、大きい木箱の底をぬいて作る。そのぬき方は、はじめは釘をはずすなどしていたが、そのうちひどくこわし出す。これが今迄にみられた、破壊的行動の一ばんひどいものであつた。

破壊的行動のみられた割には、ボックス作りへの取り組み方は、落ついて、計画性がみられた。この作業の計画性と比較して、ラジオの組立ての無計画性の示すものは、やはりラジオの組立ては本児の実力以上のものであつたのかと思つた。板をのこぎりで切ることでもできるし一応釘を真直に打込むこともできる。ラジオの時より、話す回数、量はずつと減つたが、交流という面ではスムーズさが増した。「ここ、持つてて」「この巾より3ミリ多く切るんだよ」「ここはノミで。こうして使うの」「ペニヤはたて引き使わなきや」など、治療者に指示したり、要求したりした。

この間は、治療者の作業をうまいとほめたり、治療者の方でも、本児の上手な点をほめたり、教えてもらったからよかつたと言つたり、お互いに認め合うことが多かつた。だが、ボックスは、スピーカーを入れる完全な円を開けないで、スピーカーをつけ、上にサランをはれば見えないと、完成させてしまう。かなり建設的に動いてきたようでも、めんどくさい気持には負けてしまつたのかと思う。あるいは、この程度の出来で、彼は充分満足したのかと思う。このへんの確かめはしてみなかつた。

余り話さなかつた期間だつたが、時々ふつと自分の本当の気持を出すことがあつた。たとえば、自分の飼っている犬のことをいかにも可愛らしいというように話すので、「犬、かわいいんでしょう？」と治療者が言うと、かえつて、うろたえた感じになつたりした。そろそろ、治療者に対して、警戒心がなくなつてうちとけられるようになったのかとも思い、心の壁の厚いことだ、まだまだ時が要りそうだと思つたりした。

—家庭・学校での変化—

学校での適応はよくなつているが、家庭では攻撃性が目立ち始めた。今までは叱られると自分のものを壊していたのが、この頃から、攻撃性を他人に向けるようになった。母に叱られると、母が下駄をはこうとすると、下駄がボンドで玄関のコンクリートにくっつけてあつたり父に叱られると、書類箱の引き出しをボンドで全部ついたりし始めた。又段々前に戻つたようだと言ふ。夏休みで兄が帰つて来、兄は自分の希望校に入れて貰えず現在の大学が不満で、何時もいらいらして居り、この子をいぢめるので、この子が悪くなつて来たのではないだろうかと母は心配している。

(3) 24回、25回(9月初めと中ごろの2回)

24回は、アンブを作るために用意してほしい品を、治療者に話す。治療者が黒板に書いてみようかと黒板の所へいくと、本児は少し離れた所で部品名を言う。学校の教室場面を本児が先生の役割をとつて、やつているなど

感ずる。少し冷たい感じで偉そうな、治療者と距離のある話し方をする。

お金の事を気にして、一つ一つ推測で値段を言う。そして、1回に3千円位しか使えぬと前に言つてあつたので、購入の優先順位をつけようとするらしいが、その辺になると、順位ではなく、「これもいる」というだけになり、どれが先にいるかということは考えられないらしい。

25回は、どんなことになるかと少し落着かない気分で迎えた回であつた。というのは、ラジオを止めさせることにしたからだ。理由としては、前回に本児の言つた部品を全部整えるには金額が大きすぎ、これを聞き入れると、今後ますます高いものを要求しそうなこと。かなり材料費がかかつても、本児もそれを完成させる能力があつて、自分の得意なものを完成さす喜びを味えるなら、与える意味があると思われるが、それが無いこと。専門家にきくと、このアンブを一つ作つても何の役にも立たないこと。(本児は前の3球ラジオに接続すると言つていた。)

入室してすぐ、机の上を見る、「言つたもの買つてないね」というので、「ラジオは禁止になつた」と告げる。理由はとさきくので、よく分らないが、経済的なことかもしれないし、事故でもあつたのかもしれないと言つと、「悪質ないやがらせだと思ふよ」とうがつた事をいう。かなり不満そうにブツブツ言つていたが、机の上にあつたプラモデルの小さくてやさしい方(自動車)にさつと手を出し、組立図など殆んどみないで、どんどんくっつけていく。出来上つたものは、車軸が前後反対で動かぬ。治療者が、「そのつき方こうじゃない？」と言つと「そんな事、知つてるならもつと早く言つてくれりやいいのに」と、攻撃的に不満をぶつけて来る。自分の思い通りにならぬ事態にぶつかると、計画性など全く失つて前と同じことを繰返すのがみられた。

一時間中、いらいらした様子で、ハンダゴテなど要らない所にハンダづけをすと言ひ、治療者が知らぬ間にピンポン台の上で、コテをつけたらしく、「ハンダゴテもう熱いよ。ぼんやりしちやだめだよ」と治療者の不注意を責めるような言い方をする。その時は、治療者の方も、こちらの与えた強い変化に本児がどの様に反応するかを気にされ、いく分緊張していたようで、そう言われても、自分のしたことではないと言ひ切る自信がなかつた。「困つたな、これ焦がすと叱られるかもしれないどうしてピンポン台の上へなんかコテおいたのかしら。不注意なことしちやつた」と発言した。本児は、これをきいて、ペンキをぬれば分らなくなると、なぐさめるよ

うに言っていた。後で考えると、本児らしい仕返しの一つだと思えた。その他に、来週からはもう来られないと時間の終りに言った。これも自分の好きなことを中断させる側（事務）に賛成したらしい治療者への不満の表明だったと考えられる。来られない理由としてはアテープが11月にあり、勉強しなげや高校へ入れないと言う。高校の事など少し話し合おうかと話を向けると、前と同様、さつと引込んでしまう。別れ際に、いつもの調子で、又来週ねと言うと、黙って帰っていた。

(4) 26回から28回（9月半ばから、現在まで）
—治療室内で—

26回目は、顔を合わすまで、来るかどうかと気がかりだった。いつもと同じようにやつて来て、入室してすぐに、二つ目のプラモデルに手をつける。程度の高い、部品数の多い宇宙船だが、今迄とはうつつで変つて、一つ一つ部品と組立図を参照し、順を追って作っていく。時間の終りには、今日は何番までいつたねと確認していく。この調子で完成までいのかどうか分らぬが、スピーカーボックス製作時にみられた、計画性が、今回のプラモデルでは大きく出て来た感じである。治療者も、本児を助けるように動いている。治療者の言うことも、とてもよく聞き、細かい部品を一緒に並べたりしている。

この間にみられる防衛的態度としては、「ぼくは、プラモデル知らないよ」と1時間に3、4回言い、「先生は小さい子といつもいるんでしょ。小さい子の方がよく知ってるから、教えてもらつたら」と言う。かなり細かいものであり、失敗した時にどの様な態度をとるのかと思う。

話は、殆んどプラモデルに関する会話だが、父親のことを二回ぐらいつづけて話し出す。「おやじさんは、いい年してるのに、おじいさんと言うとおこる」「おやじさんはね、お庭いぢりだけが好きな」と少しひやかしている口調。こちらで、少しつつ込もうとする態度をみせると、逃げていく様子のあることは前と変らぬが、話し方は、ずつとくだけてきた感じである。

友達のこと、新しく転校してきた子を誘つて、シネ

マを見に行こうかと思つてるんだ等と話す。ああ少しずつ変化しているなどと思う。

—家庭・学校での変化—

学校の先生は、友人とも話すようになったし、運動会にも中学入学以来初めて参加したし、よくなつているという。併し母親は進歩を認めようとせず、運動会に出たのは、担任が特別に気を付けて呉れたからであり、本人の進歩ではないと考え、又担任はよくなつたと言つてもあの先生は調子がいいからといい、なかなか進歩を認められない。併し家庭内では、姉の次に、この子を徐々にではあるが受容しているように見える。

叱られた場合に、他人を攻撃することは益々ひどくなり、先日も父が少し小言を言つたら、洗面器の水を盥の上におちまけ、父がそれをとがめて、おしりをぶつたら今度は知らないうちに盥を何枚か切つてしまった。又、叱ると家を出て夜おそくまで帰らないことが今までもあつたが、この頃ひどくなつたように思う。結局は帰つて来るが、その間心配でならない。

近頃反抗するので、反対の事を言つて、子どもをコントロールしていた。寒い日は「今日は余り寒くないから厚い上着を着ていなくていいねえ」というと、厚い方をきていく。又雨のひどい時は、「雨はひどくないから長靴はいらないね」というと、長靴をはいていく。しかし一方、勉強など嫌そうな時は、反対の行動を予想して「勉強が嫌なら早く寝なさい」というと、「はい」とすぐに寝てしまうこともある。こうして反対を言つてコントロールしていたが、この方法も心配になつてきた。先日本児は「お母さんの言う反対のことを僕がしたからよかつたよ。厚い上着を着ていつて僕は助かつたし、又長靴をはいていつたのでよかつたよ。お母さんの言う反対のことをしていると上手いくね」とさも母親を軽蔑したように言うので、この方法もよくないと反省していると言う。又そろそろ3年生の終りに近づいて来て、将来の事が心配になつている。本人は高校へ行くよ、とけろつとしているが、入れる高校のないことはよく知つており本児の将来についていろいろ迷つている。

IV 考察と反省

治療開始後半年を経過したケースの中間報告であるが本児は、時間及び回数割りには治療室内での変化が少ないと言える。これは、年令も長じており、不適応を起していた期間が長いためであろうが、治療者の態度にもよるのではないかと考えている。

治療者は、中学生を治療で扱うのは初めてであり、本

児が初回から、かなりはつきり人間に対する敵意を表明し、室内には大工道具、電気工具など使い方によつては危ないものがあつたので、はじめのころは、心の中には本児に怪我をさせられるのではないかという不安があつた。また、全体的に治療者のとつた態度は、「友達のような態度」であり、これも、治療の展開をおくらせたの

ではないかと考えている。何故こうしたかという、一つは治療者には、中学生の男の子の家庭教師をした経験から、友達の態度が一番とりやすかつたためもあり、もう一つは、今考えると“頼られる”ことから逃げようと無意識には思っていたのではないかと思う。幼児が、甘えを表現して来た場合は、経験もあり、それを受けとめる自信はあるが、背も自分より高い本児に依存されるのは、安心できないと思つたからである。

本児は、治療室内よりも、家庭、学校の場面でより変化を示したと考えられる。夏休み前は、修学旅行にも参加し、家庭でも扱いやすくなつたと母は報告していたが9月には客観的にみると学校ではいい方に変化している報告があるのに、母親は、それを認めようとせず、家庭では、反抗が実害を伴うものになり、悪くなつたと報告している。

治療室内では、かなり建設的態度をみせた時期に、家庭では反対し、暴力をふるう。この理由を考えてみると

一つは、治療者がいづらかサポートイブな態度をとりすぎたために、治療場面で出せないアクティング・アウトを家でしているのではないかとすることがあり、もう一つは、本児のように家族の人との人間関係が悪い場合に本児だけを心理療法の対象とすることの問題である。心理治療によつて、今まで自信もなく、小さく縮んでいた自分が大きくなり、家族の人に対する態度が變つて来る。しかし、家族の人の受入れ体制は変らない。幼児の場合は、治療過程でアグレッシブになり、家庭でもそれを出しても、ある程度は見のがす事の出来る行動も多く、どうしても困る場合には、体力的に押えて止めさせる事もできるが、大きい子どもの場合は、アグレッシブな行動は受け入れられにくく、実害を伴うものであればあるだけ、そこから又別の問題を生ずる可能性もあり、むづかしい問題である。家族全員に対するファミリー・カウンセリングが可能ならば、本児のようなケースの治療は進展も早いと思われる。

A Process of Psychotherapy with an Emotionally Disturbed Boy

Kaname Moriwaki, and Yumiko Iwamura

This case is a boy of 14 years old, a junior highschool student. The problem complained of by his mother was, "He was treated harshly by his classmates.....his clothes were often muddy all over, and once he could hardly walk to come back home because of having been beaten down. And he dislikes to study".

His I.Q. is 99 by Binet Test, he is quite an under-achiever in scholarship. He had been thought dull by all the family members (father, mother, elder sister, and elder brother), because he was an awkward child and the result of I.Q. test in the second or third grade of the primary school was about 70. This can be supposed to be the strongest cause for the loss of his self-confidence.

We decided that he would be adaptable for our psychotherapy, and Moriwaki has a counselling interview with the mother about once a month, and Iwamura has the individual therapy session with him once a week. The therapy was begun in February and 28 sessions have been carried on by now at the end of September.

In the therapy room he tried to make a set of radio at first, but his way of making it was pretty incoherent. And in this period (from Feb. to Jun.) he revealed his hostility and untrustworthiness toward the human being. In July and August his way became a little scrupulous. In September, beginning to make a plastic model, he has been very careful in putting the pieces together. His school teacher informed that his change was seen in relation to his friends. He could join the school excursion to Kansai and the athletic meeting in fall.

At home he shows little change, still making verbal aggression against mostly the father and the brother and doing bitter mischiefs when he was scolded. (This is an intermediary report)